2007 年 4 月 27 日

発表者：新日鉄ソリューションズ㈱
代表取締役社長　鈴木　繁

2007 年 3 月期　決算説明会 Q&A（要旨）

1.全体業績

Q: 2007 年 3 月期の業績、特に利益は会社予想を上回る着地となったが、上ブレすると確信したのは何月頃か。

A:当社の場合、年間売上高の 2 割強を 3 月に計上する。たくさんのプロジェクトが走っており開発効率の変化などもあるため帳簿を閉めるまで業績は正確には分からない。また、退職給付会計の割引率は 3 月の金利実績を参考にする。従って、年度決算の着地は 3 月にかけてイメージが見えてきた。

Q:2008 年 3 月期の業績予想を前年同期と比べると、上期は増益だが下期は減益になっているが理由は。

A:2007 年 3 月期の下期は退職給付会計における割引率変更により一過性の利益増加があったため、2008 年 3 月期の下期はその反動減が見込まれる。

Q:標準化・生産技術力強化などの取り組みによってどの程度の生産性向上が見込めるのか。

A:現時点で計数ターゲットは設定していない。

2.個別事業分野

Q:親会社である新日鉄向けの売上が前年よりも 16 億円減少している。今後の見通しを教えて欲しい。

A:2007 年 3 月期については計画の端境期ということで売上規模が落ち込んだ。新日鉄は生産量が高水準なためＩＴ投資需要も大きく今後売上規模はある程度上方に戻ることが想定される。但し、投資の際は優先順位付けを行うため大きく増えることは想定し難い。

3.その他

Q:社長は年頭挨拶で「成長の加速」という言葉を使っているがその意図を教えて欲しい。

A:2001 年の新日鉄ソリューションズ㈱発足以降、事業を整理してきたことにより、連結売上高は 1,500 億円前後と横這いが続いた。事業整理も終了し、マーケット環境も良いので「2007 年 3 月期からは成長しよう」と社内で掛け声をかけ実際に成長することができた。成長に向けて人的リソースネックが続いているが、更に成長の勢いを増すために、新卒・中途の採用数を増加させ、生産性の向上もはかる。また、比較的リソース制約の少ない基盤エンジニアリング関係の事業やサービス事業を伸ばしていく。会社が新しい成長ステージに入ったということで会社をリードするため「成長の加速」と表現した。

以上